

平成 30 年度 人間環境科学研究所 活動報告

人間環境科学研究所長 柳 元和

2018 年度 第 1 回シンポジウム

2018 年 2 月 22 日、人間環境科学研究所では、前帝塚山学園長、柳澤 保徳 特別客員教授（当時）を迎えて、シンポジウム「帝塚山学園の歴史に学ぶ：大学に焦点を当てて」を開催した。柳澤氏は、「自校史教育は学園のこれまでを語るもの」、「自校教育は学園の今とこれからを語るもの」と簡潔に整理され、帝塚山大学の自校教育について、学生たちの「居場所」の確認と帰属意識の醸成が必要なこと、学びの場である自大学のことを、良い面だけでなく短所も含めて、知る・考える機会を提供することの意味について語られた。ここでの議論を踏まえて 2018 年度第 1 回シンポジウムを「学修支援のありかたを考える—ユニバーサルデザインとアクティブ・ラーニングの整合性—」と題し 9 月 27 日に開催した。

ゆとり教育の影響を巡って議論が交わされる中、結局の所、知識詰め込み型の学修に立ち戻っているのではないかと危惧される今日このごろである。系統主義と経験主義の不毛な対立は、かつても現在も継続しているように思われる。「デジタル・ネイティブ」世代の若者を対象に教育活動を展開するにあたって、解決すべき課題は何であるのか、議論を深めることを本シンポジウムの目的とした。

第 1 演者である柳は、平成 30 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会での口演「ICT を活用したアクティブ・ラーニングにおける音読の効果」について報告した。食物栄養学科は理系の学科に分類されるが、本大学の受験生には、いわゆる文系コースを選択していた者も多い。基礎的な理系の知識なしに栄養学関連の専門書を読みこなすことは至難の業と言えよう。当然、最初は教科書を独力で読むことができない学生が散見される。本報告は音読が学生の読解力を助け、学生が自学自習を進めていく自信を創出する上で有効である可能性を示唆するものである。

第 2 演者の村上 友香 氏は帝塚山中学校・高等学校 情報科 教諭である。国立奈良工業高等専門学校や大阪府立八尾翠翔高等学校で、アスペルガーや脳性麻痺、知的障がいをもつ生徒たちへの支援を経験された。本講演では「ユニバーサルデザインの授業づくり—自分の意志でメッセージを発信するために—」と題して、生徒たちの学習意欲をどのようにして高めていくかについて話された。多くの生徒は今の状況を「自分が選んだ」という自覚なしに学習を重ねている。これでは主体的な学習は困難である。そこで授業中に集中して作業を完結させるよう徹底して指導すること、できないことを一つずつ確認し克服させていくこと、自分の位置を確認させ目標を立てさせることなどの重要性を強調された。特に検定試験合格を単位認定の必須項目に掲げていることについて、「絶対に合格できる」という目標設定が、自主的な補習への参加を促し、学歴コンプレックスをはねのける力となっていると紹介されたのが印象的であった。

第 3 演者は濱千代 早由美 氏（本学 非常勤講師）である。濱千代氏の専門は宗教社会学、文化人類学であるが、今回は「教養科目履修の大学低学年のための『深く考える』技術—初年次教育の教室と大教室をつなぐ試み—」と題して講演いただいた。現在の大学教育の課題として”deep thinking”の機会が無いことをまず挙げられた。学生は「勉強ができない≠頭が悪い」ことを理解していない。

「知識の棚」が無いことは必ずしもデメリットとは言えない。ところが穴埋め式の知識を「知識の

棚」と誤解している学生が多い。このような知識はすぐに手に入る情報であり、いつでも捨てられる情報である。そうではなくて分かっていることと分からないことを明確にし、分からないことを調べる作業を通じて本当の「知識の棚」は形成されていく。この自由な創造的作業の面白さを理解できたとき、学生諸君は論述の楽しさを知る。これを目標として初年次においては、聞き方・読み方の訓練を徹底して行っていることが紹介された。しかし学生が興味のあること、自分が大事だと思ったことを意識するのは、とても難しい作業であるらしいことも指摘され、まず教える側が大事に思っていることを的確に学生に伝えられているかどうか反省すべきと述べられた。

フリーディスカッションでは基礎学力向上のために教員がどのように連携すべきかについて熱心な討論がなされた。

第2回シンポジウム

第1回シンポジウムで濱千代氏の講演を受けて、民俗学的手法への興味が喚起された。そこで日本における超高齢社会の問題を考える上でのヒントを得るために「超高齢社会の考現学—『一切しらべ』の学際性と応用性—」と題して2019年2月28日にシンポジウムを開催し、濱千代氏に講演いただいた。

「一切しらべ」とは今(こん)和次郎が提唱したもので、日本の民俗学調査において採用された方法である。現代の習俗、モノを調査するにあたり「変態的なものをさけて、一般民衆の日常生活とそれを主とするもの」が興味の対象であり、全てを記録(悉皆(しっかい)調査)し、多様性と差異を統計的に分類・分析しようとする試みである。過去において都市計画や建築学に応用されたが、現在、世代間格差を埋めるための手法として検討がなされている。社会心理学や医療人類学への応用も期待されている。詳細は本巻に濱千代氏が寄稿された論文を参照されたい。

ワークショップに参加された方々からは、興味を持った点の違いが興味深かった、路上観察で一切しらべをやってみようかと思う、写真を見て単なるモノの集合体が意味のあるモノ今後を深く考え未来につなげるモノに変化するのが大変おもしろかった、などの感想が寄せられた。

その他の活動

その他、所員の学術活動について列挙しておく(下線部が人環研所員)。

- Yasui S, Ando T, Ozaki M, Ogawa Y, Shioji K. A new method to prepare functional phosphines through steady-state photolysis of triarylphosphines. *Heteroatom Chemistry*. 2018;29:e21468. <https://doi.org/10.1002/hc.21468>
- 柳 元和. 【臨床医として知っておきたいミネラルの知識】 ナトリウム. 成人病と生活習慣病 48 (6):623-627, 2018.
- 柳 元和. A-8 ICTを活用したアクティブ・ラーニングにおける音読の効果. 平成30年度 ICT 利用による教育改善研究発表会 2018年8月9日 公益社団法人 私立大学情報教育協会.